

「業務用米の多収穫・低コスト生産における取組結果と今後の対策」

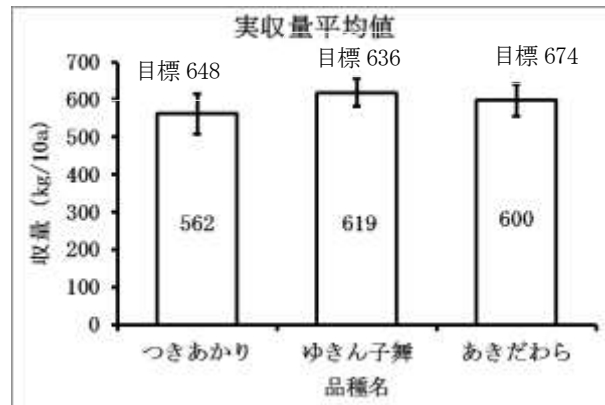
1 はじめに

県内 24 のモデル経営体で、業務用向けの多収性品種（晩生の「あきだわら」10 経営体、早生の「つきあかり」9 経営体・「ゆきん子舞」5 経営体）の多収穫栽培に取り組みました。そこで、取組結果と課題を踏まえた今後の主な対策についてご紹介します。

2 取組結果

(1) 収量及び収量構成要素

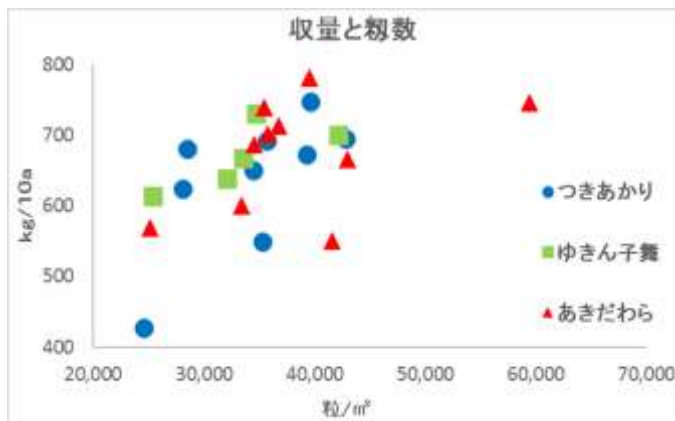
○10 a 当たりの平均収量は、「つきあかり」が 562 kg (484~636 kg)、「ゆきん子舞」が 619 kg (561~650 kg)、「あきだわら」が 600 kg (540~681 kg)と目標を下回った。



品種ごとの実証ほの平均実収量

「つきあかり」9 地点、「ゆきん子舞」5 地点、あきだわら 10 地点の各平均値

○全体的に籾数が少なく、収量を確保できなかったほ場が多かった。「つきあかり」と「あきだわら」は、ほ場差が大きかった。



収量と m^2 当たり籾数の関係

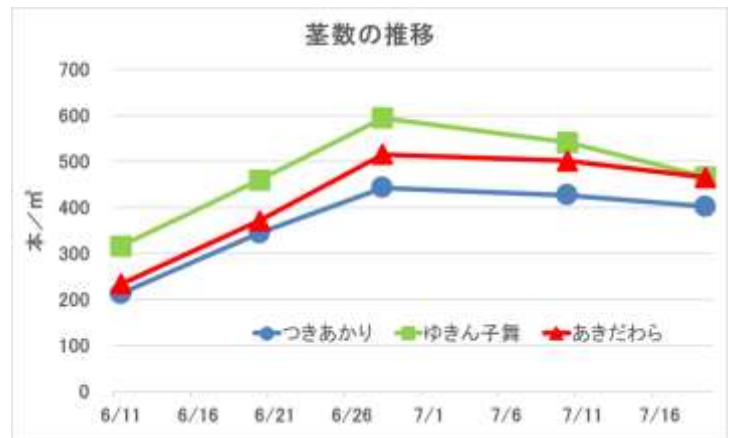
坪刈収量及び収量構成要素(普及指導センター実証ほ)

	穂数 (本/ m^2)	一穂籾数 (粒)	m^2 籾数 (粒/ m^2)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	坪刈収量 (kg/10a)
つきあかり	365	94	34,268	83	24.2	638
ゆきん子舞	415	78	33,608	83	23.3	670
あきだわら	387	99	38,460	80	22.0	676

「つきあかり」9 地点、「ゆきん子舞」5 地点、あきだわら 10 地点の各平均値

(2) 生育

- 茎数は「ゆきん子舞」、「あきだわら」、「つきあかり」の順に多く推移した。「つきあかり」は、特に、少なく推移した。



品種別の茎数の推移

3 実証成績等を踏まえた今後の技術対策

(1) つきあかり

- 田植時期が遅かったほ場、標高地のほ場、基肥量が少なめのほ場で目標茎数がとれなかった。
 - ⇒ 生育量が確保できる5月上旬の田植え、基肥施肥量が不足しないよう施用
- 大豆跡とほ場整備直後のほ場で倒伏し、登熟歩合が低下し収量が少なかった。
 - ⇒ ほ場条件に合った基肥施肥量を施用

(2) ゆきん子舞

- 田植時期が遅かったほ場で目標茎数がとれなかった。
 - ⇒ 生育量が確保できる5月上旬の田植え
- 紋枯病が多発生し、茎質が悪くなり倒伏し登熟歩合が低下した。
 - ⇒ 発生状況に合わせ紋枯病防除を実施

(3) あきだわら

- 田植え時期がやや遅かったほ場で、出穂期が遅くなり登熟不良で青未熟粒が多く整粒歩合が非常に低くなった。
 - ⇒ 登熟可能な気温が確保できる時期に出穂するよう田植え
- 全量基肥施肥で中間追肥などを施用した結果、収数過剰となり登熟歩合が低下し収量が思うようにとれなかった。
 - ⇒ ほ場条件に合った基肥施肥量及び中間追肥量を施用

4 おわりに

業務用向けの多収性品種を栽培する皆さんが、多収穫栽培のポイントをしっかりと実践することにより、高収量を確保して最大の収入をあげて頂くことを期待します。

なお、併せてコスト低減については「モデル経営体での取組実績(コスト低減の取組結果)」と次年度課題(2月掲載)を参考として低コスト目標を達成してください。